

誰かの役に立つ視点を

長崎大の寄付講座 最終回

連合・古賀会長 働く意義伝える



学生に連合の活動などについて話す古賀会長
＝長崎大経済学部

連合の古賀伸明会長が16日、長崎市片淵4丁目の長崎大経済学部で講演し、連合の活動内容や労働の意義などについて、学生ら約500人に語った。

連合長崎が本年度開講した寄付講座(全15回)の最終回の講師として演壇に立った。古賀会長は、非正規労働者が全体の4割弱に上り、収入200万円以下の企業

労働者が約1100万人いると現状を説明。有給休暇の取得率が海外に比べて低いことなども指摘し、連合が「働くことを軸とする安心社会」の実現を掲げて取り組んでいることを紹介した。働くことの意義については、時間と能力を費やしたことへの報酬をもらうだけでなく、苦しい経験をすることで成長でき、社会にかかわ

て誰かの役に立てるという視点で捉えるよう提言した。労働組合の政治活動について学生から投げ掛けられた疑問に対し、古賀会長は「働くことや暮らすことと政治は独立して存在しているわけではない。日本国民はお上に任せておけば何とかなると考えがちだが、一人一人が政治に参加しないとけない」と訴えた。連合は本年度、全国の12大学で寄付講座を開いている。(村田傑人)